

地域に根差した認知症カフェ ～地域力向上への第一歩～



兵庫県西宮市

高須地域包括支援センター

甲山地域包括支援センター

認知症地域支援推進員

認知症地域支援推進員

齋藤 環

後藤 香織

1. 担当地域の概要①

人口: 485,154人

65歳以上人口: 114,802人

高齢化率: 23.7%

日常生活圏域数: 15圏域

地域包括支援センター: 15箇所

面積: 100.18km²

要介護認定者数: 12,707人

要介護認定率: 11.1%

(H31.1月 月報より)

認知症地域支援推進員: 2名



... 地域包括ケア連携圏域

北部圏域
高齢者数 11884人
高齢化率 27.1%

瓦木圏域
高齢者数 26256人
高齢化率 21.3%

甲東・甲陽園圏域
高齢者数 26312人
高齢化率 23.4%

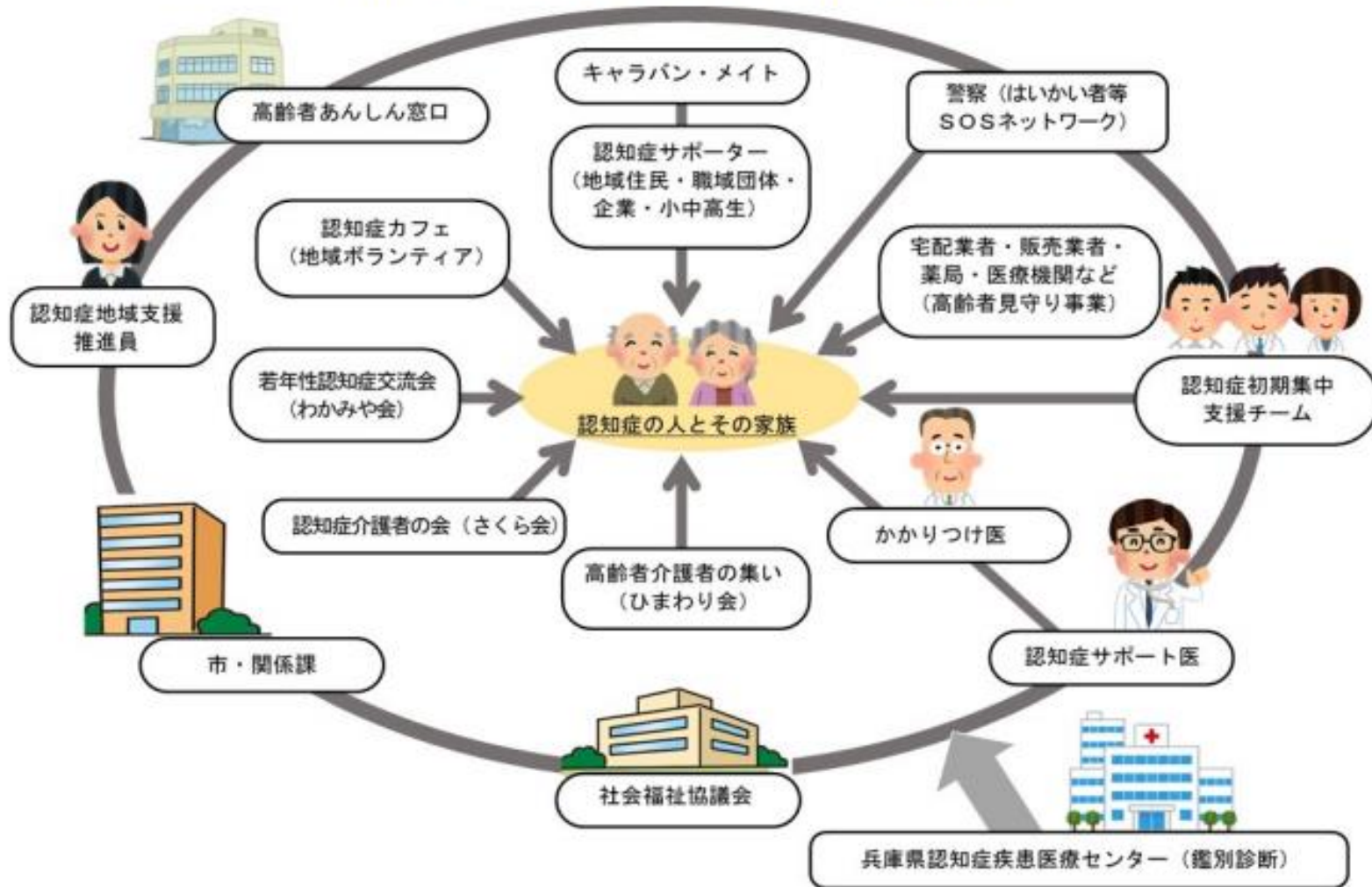
中央圏域
高齢者数 25302人
高齢化率 22.9%

鳴尾圏域
高齢者数 25368人
高齢化率 27.1%

(H31.3.31現在)

3. 市町村の認知症施策全体

【認知症の人とその家族を支える関係者・機関】



4. 活動内容の位置づけ

西宮市の認知症施策は、

- ①認知症に関する理解の促進・啓発の充実
- ②認知症を早期発見・早期対応できる仕組みづくり
- ③認知症の人や介護者を支える体制の充実
- ④若年性認知症支援



の4つの柱を取り組みの基本方向としており、認知症カフェは、③認知症の人や介護者を支える体制の充実の中に位置づけられている。

2020年度までの中期目標として、認知症カフェを15か所ある地域包括支援センター圏域(15圏域)に1か所ずつ開設することを掲げている。

2019年3月現在、8か所の地域包括支援センター圏域に認知症カフェが誕生しており、立ち上げ支援中が1か所の状況である。

認知症地域支援推進員は、地域住民、市社協、包括、事業所等と協力して、立ち上げと継続の支援を担っている。

5. 推進員の役割

(1) 認知症地域支援推進員

委託包括である高須地域包括支援センター、甲山地域包括支援センターにそれぞれ1名ずつ専任で配置

(2) 認知症地域支援推進員の役割

① 認知症の正しい理解と支援方法等に関する周知・啓発

- ・認知症研修会、事例検討会の開催
- ・あったか見守り声かけ訓練の開催
- ・地域の様々な団体に向けての認知症サポーター養成講座の開催

② 地域において認知症の人を支援する関係者の連携

- ・にしのみや認知症つながりフェアの開催

③ 地域の実情に応じて認知症の人や家族を支援する事業の実施

- ・認知症ケアパス(全市版・地区版)の作成協力
- ・**認知症カフェの立ち上げと継続支援**

④ 若年性認知症支援

- ・若年性認知症交流会(わかみや会)の運営
- ・若年性認知症の人と家族の個別支援

6. 西宮市の認知症カフェについて



(1) 特徴

西宮市の認知症カフェは、

- ①運営主体は地域のボランティアであり、そこに専門職が関わり、参加者の相談にのったり、運営上の課題や認知症の人や家族への対応方法など一緒に考えていくスタイルをとっている。
- ②『認知症カフェに参加する全ての人々が認知症理解を深め、参加者同士のつながりができ、見守り・支える活動へつながる』という地域力向上の視点を持つ。



(2)現状

立ち上げに至った経緯は様々。

★は今回、発表する認知症カフェ

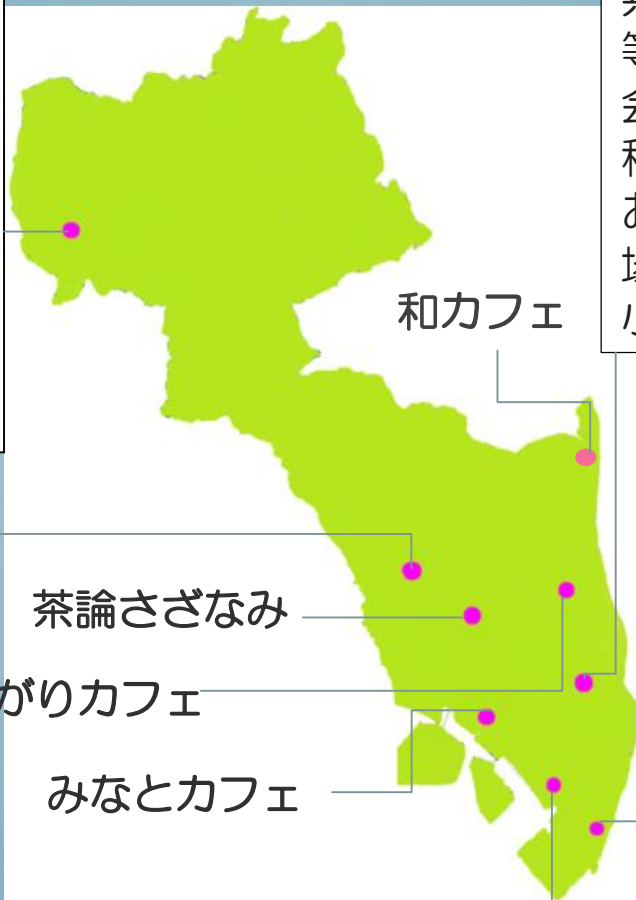
名称	開設年月	特 徴
★かすたねっと	H24年1月	モデル的に推進員配置の包括2階の地域交流ホールで開催。
ゆとろぎ茶論こしいきわ	H26年12月	希望を募り、手挙げした包括建物の中で開催。
みなとCafe	H27年5月	元民生委員が認知症カフェ開催を希望。
茶論さざなみ	H28年5月	介護経験者が介護者の集いを作ろうとしているところに認知症カフェを紹介し、開催することになる。
★鳴北ちゃ茶	H29年1月	有料老人ホームが地域貢献の一環として開催を希望。
カフェなぎさ	H30年1月	元民生委員がつどい場の開催を希望しているところに認知症カフェを紹介。
ぽっかぽかつながりカフェ	H30年4月	多世代交流の毎日型つどい場を開催していた。認知症の方にもっと参加してほしいと、認知症カフェも追加。
★にこにこ丸山カフェ	H30年12月	特養が地域貢献として認知症カフェの開催を検討したいと市社協へ相談、市社協から推進員につながる。
和カフェ	R1年10月	介護者が思いを吐き出せる場所が必要と痛感し立ち上げる。
浜脇地区	立ち上げ協議中	特養CMが、研修会で推進員から認知症カフェのことを聞き、地域貢献として開催を希望。H30年10月～立ち上げ協議中。

★にこにこ丸山カフェ

比較的、山間部に位置し西宮市街地へは車で40分ほどかかるため、生活圏域は神戸市北区を利用する方が多い。**新興住宅地と昔ながらの住民の住む地域とがはっきりと分かれている**山口地域包括圏域内に位置する。名前の由来は地域の象徴的な山の名称「丸山」に認知症の「に」、コミュニケーションの「こ」を合わせて「にこにこ」とした。

ゆとろぎ茶論こしきいわ
推進員拠点

西宮市の認知症カフェ



茶論さざなみ

ぽっかぽかつながりカフェ

みなとカフェ

カフェなぎさ

★鳴北ちゃ茶

歴史ある鳴尾地区にあり、一軒家や分譲マンションが多い。交通の便も良く、医療機関や公共機関、生活に必要なスーパー等も近くにある。自治会・老人会等は活発に活動している。名称の由来は、鳴尾の北にある、お茶を飲んでにぎやかに過ごす場所の意味。小松地域包括圏域にある。

★つどい場かすたねっと

西宮南部に位置し、武庫川を渡ると尼崎市。URの団地群、県営・市営住宅が中心の地域。西宮初の認知症カフェ。高齢化率は30%超。名称の由来は、高須の地名を並べ替え“かすた”“ねっと”はネットワーク。“かすたねっと”の音のようにみんなでワイワイ楽しく過ごせたらの意味。高須包括圏域。**推進員拠点**

(3) 立ち上げ支援事例ー1

・にこにこ丸山カフェの場合

《推進員が関わる背景・きっかけ》

平成27年、A特養から地域貢献の一環として認知症カフェの開催をしたいと市社協に相談が入り、推進員につないでもらう。A特養と市社協、推進員、山口地域包括とで実行委員会を立ち上げ、検討が始まる。

比較的、福祉に先進的な新興住宅地区（新地区）であればスムーズに立ち上がるだろうと話に上がるが、すでに活動が盛んな新地区ではなく、今後の福祉の推進のきっかけになるよう、昔ながらの住民が住む地区（旧地区）での開催検討から始める。

旧地区社協会長への相談を通じ、自治会域での実施を目標設定する。その中で、旧地区の中でも昔ながらの住民と新興住民とが混在し比較的柔軟なB地区の自治会長、老人会長を紹介していただき、老人会主催のおしゃべり会へ参加し関係を構築。

■A特養と地域包括が交代で3か月に1回、おしゃべり会に参加しミニ講座を持つことになる。

うまくいった点

それまでなかなか関わりを持ちにくかった旧地区社協会長とつながりができたこと。
また、その中での旧地区の地域活動に関わることができたこと。

うまくいかなかった点

おしゃべり会は会として成熟しており、そこからの発展系として、認知症カフェへは持って行けなかった。

《立ち上げ前の工夫》

約1年間、おしゃべり会から発展させた認知症カフェを模索したがうまくいかず、別の方法を検討する。

●地域状況の把握と今後の連携を考え、A特養以外の山口地域内にある3特養にも集まってもらい、情報交換を行う。

▣市内の認知症カフェの紹介、カフェでの専門職の役割等を紹介し、山口地域でも立ち上げを検討していることを伝える。

●新興住宅地で福祉に力を入れている地区（新地区）への相談。

▣新地区で開催されている福祉ネットワーク会議で市社協から認知症カフェについての紹介を行う。新地区社協会長にオブザーバーの形で入ってもらい、山口地域認知症カフェ立ち上げ実行委員会を作り、協議を始める。

ポイント

一度、取組んでみてうまくいかない時がある。その時はもう一度、情報収集・整理し、再スタートすることも必要。

うまくいかなかった時には、すぐに進めていけそうなところから始めてみるのも一つの方法。

《立ち上げのプロセス》

- ・立ち上げ協議の期間：平成29年8月18日～平成30年12月13日 約16ヶ月間
- ・初回開催日：平成30年12月13日
- ・進め方：事前に専門職のみで協議し、概ねの方向性を確認。専門職が決めた方向性に沿わせながらも、実際のボランティアの意見を尊重し修正、進めて行く。会議の進行は推進員が主に行う。

	内容と課題	推進員の役割・工夫
第1回 H29. 8.18	<ul style="list-style-type: none">・住民主体の認知症カフェ運営を目指すことを確認・自治会域での開催ではなく、山口地域全域で考えることを確認・開催場所をコープに打診することを決定	<ul style="list-style-type: none">・コープとは他の認知症関連事業で既に協力体制があったため、推進員からスムーズに打診できた。・旧地区の協力も必要。つながりのできていた旧地区社協会長へオブザーバー参加を打診する。
第2回 9.20	<ul style="list-style-type: none">・コープ担当者が参加・認知症カフェの役割を確認・3特養へも協力依頼することを確認	<ul style="list-style-type: none">・他地域のカフェの状況を伝え、カフェの役割や立ち上げプロセスのイメージの共有化を図る。
第3回 10.30	<ul style="list-style-type: none">・旧地区社協会長がオブザーバー参加・旧地区の状況の共有と協力の打診	<ul style="list-style-type: none">・認知症カフェの運営がなぜ、地域ボランティアでなくてはならないのかを説明。地域で協力して欲しいことの具体的な内容の提示。
第4回 11.20	<ul style="list-style-type: none">・ボランティア募集チラシについて☛チラシには<u>認知症</u>カフェボランティア募集と明記する。・4特養連携について	<ul style="list-style-type: none">・ボランティアの募集チラシを推進員が作成。・特養連携については他地域で多施設が関わっているカフェの状況を伝える。☛新地区社協会長と市社協とで特養を訪問し協力依頼する。

	内容と課題	推進員の役割・工夫
第5回 H29. 12.18	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア募集について ・旧地区の協力体制の確認 ☛ 実行委員会への参画はしないが協力は取り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア募集については回覧板と実行委員の個々の声かけで集める。 ☛ 新旧、両地区の協力を得られ、チラシに協力団体として名前を載せて両地区に回覧ができた。
第6回 H30. 1.29	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア募集進捗状況の確認 ・協力特養を交えての協議 	<ul style="list-style-type: none"> ・協力特養に市における認知症カフェの定義の説明を行い、山口地域で目指す認知症カフェの役割やカフェでの専門職の役割のイメージ化を行う。
第7回 2.21	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの顔合わせ ☛ 旧地区からの参画は難しいと予想していたが新旧、半々の割合で15名が集まる。中には認知症当事者とその夫が参加。 	<ul style="list-style-type: none"> ・集まったボランティアに認知症カフェについて説明を行う。 ・今後、開催に向けて決めないといけない事や行わなくてはならないことを、先に立ち上がってるカフェの事例から大まかに説明。
第8回 3.28	<ul style="list-style-type: none"> ・代表の決定 ☛ 新地区社協会長の意向から認知症当事者の夫に一旦お願いする形で決定。 	<p><失敗点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの役割についてしっかり説明ができないまま、市社協と新地区社協会長が半ば強引に会議を進めてしまう。ボランティアの一体感が持てないままにどんどん話が進んでしまうことへの不安感だけが残ってしまう。
第9回 4.23	<ul style="list-style-type: none"> ・カフェの名称の決定 ☛ 名称にはいろんな思いが込められるため、それぞれの意見を出し合って決定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新旧両地区からボランティアが集まり、なかなか一体感が持てないまま会議を進めていたため、席をバラバラにしてグループを作り、「認知症」についてのエピソードやどんなカフェにしたいか、カフェの名称について話し合う。

	内容と課題	推進員の役割・工夫
第10回 H30. 5.25	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症サポーター養成講座の開催 ・ボランティア意向確認 ・カフェ開催曜日についてのアンケート <p>★事件発生★ 代表の妻で認知症当事者が行方不明になる。 →一人で帰宅されていたことがわかる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・認サポは包括が行う。 ・推進員からは他地域のカフェの様子を動画を交えて紹介し改めてイメージを深めてもらう。 ・他地域の紹介を行ったうえでボランティアに自分たちがイメージするにここ丸山カフェについて意見交換を行う。 <p>☛立ち上がった後にボランティアと関係を築いていくのは包括のため、意見交換の司会も包括が行う。</p>
第11回 6.28	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアでお試しカフェを開催 ・ボランティアの役割を再度確認 ・介護者の話として代表から伝えてもらう。 <p>☛この時、初めて代表が「妻が認知症だ、迷惑をかけた」と話す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアが「お茶出しだけ」のイメージで集まっていたこと、それまで新地区社協会長と市社協が半ば強引に進行してしまっていたこともありボランティアから不満が漏れる。また、新旧地区のボランティアがなかなかひとつにまとめられなかった。 ☛代表が妻の認知症をみんなに伝えたことで、推進員から「認知症で迷惑をかけた」と思うのではなく、「どうぞ迷惑をかけてください」と言えるカフェにしようをコンセプトとして提案。少し意識が変わる。
第12回 7.26	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアが不安に思っていること、不満に思っていることを吐き出し、今後の運営方法の方向性を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアと推進員とだけで話を聞く。 ☛「気軽な気持ちで来たのに…」「みんなが同じ方向を向かないといけない」「得意なこともなくアイディアも出せない」などいろいろ思いをぶつけ合う。 →専門職が土台を作りそれについて議論する形になる。

	内容と課題	推進員の役割・工夫
第13回 H30. 8.23	<ul style="list-style-type: none"> ・保険について ・オープンイベント、プレオープンについて、備品や準備物の確認 ・オープン日の決定 	<ul style="list-style-type: none"> ・オープンまでの必要な事項を3グループに分けて提示。ボランティアは好きなグループに入り、準備に向けて進めてもらう。各グループにはそれぞれ専門職が入り、取りまとめる。
第14回 9.27	<ul style="list-style-type: none"> ・グループでの準備 ・オープンイベントのタイムスケジュールやプレオープンについて 	<ul style="list-style-type: none"> ・プレオープンでは動線の確認と同時に、自治会、老人会、地区社協、民生委員等に来てもらい広報も兼ねるようにする。 →各団体への案内はボランティアや専門職でつながりのある人から直接案内をする。案内文は原案を推進員が作成しボランティアと確認、修正。
第15回 10.25	<ul style="list-style-type: none"> ・「認知症カフェ開設助成」申請書作成 ・準備物等の確認、購入 ・チラシについて 	<ul style="list-style-type: none"> ・市社協からの助成金5万円を申請。 ・チラシはA特養が原案を作成しボランティアが修正、推進員が確認する。
第16回 11.22	<ul style="list-style-type: none"> ・プレオープン ・プレオープンで出てきた問題点(人員配置や必要物品等)について最終確認 ・地区版認知症ケアパスへの掲載確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・同時期に進めていた新地区版認知症ケアパスへのここにこ丸山カフェの掲載について説明。 ・これまでの経過へのねぎらいとオープンを迎えられることへの感謝を伝え、一致団結へ。
12.13	第一回カフェ開催 オープンイベント ☛開設挨拶で代表が妻の認知症の事について触れる。 →認知症をオープンにできるカフェの始まりへ。	<ul style="list-style-type: none"> ・代表が挨拶文の作成に不安とのことで推進員が確認。代表の思いが伝わるように一緒に考える。

《効果》

●新・旧地区にとられない新たな地域活動へ！

それまで新地区の活動は新地区の物、旧地区の活動は旧地区の物、とはっきり分かれていたが、ボランティアが新旧両地区から集まったことで、どちらの地区からでも参加しやすい認知症カフェに。また、開催場所を地域の誰もが買い物に訪れるコープにすることで「にこにこ丸山カフェ」が山口地域全体の物となった。

→最初に旧地区とつながりを持てたことが山口地域全体で認知症カフェに取り組んでいくことへの理解をもとめることができた。

●ボランティアの認知症対応力の向上、百聞は一見にしかず！

運営ボランティアに認知症当事者とその家族が関わることでボランティアが自然と認知症の人をサポートし、認知症カフェの役割を理解することができた。

→運営を専門職ではなくボランティアとすることで、認知症当事者や介護家族が運営に関わることができる。

●認知症のことをオープンにできる場に！

代表がボランティア、そして開設挨拶で妻の認知症の事を話してくれたことで認知症のことをオープンにできる「認知症で迷惑をかけても大丈夫」なカフェへの意識が高まった。

→広報チラシにも「認知症」の文字を隠さずに掲載することを決める。

●おまけ

推進員としても、それまで関わりの少なかった山口地域で、包括や地域団体と一緒に動いたことにより、山口地域での他の活動につながる関係性の構築ができた。特に包括とは密につながれたことで、今後の連携も取りやすくなると感じている。

(3) 立ち上げ支援事例ー2

・鳴北ちゃ茶の場合

《推進員が関わる背景・きっかけ》

有料老人ホームが地域貢献を検討していた中、認知症カフェのことで知り、市社協に連絡をとってきた。市社協から、一緒に立ち上げ支援を行う為に、推進員に連絡があり、関わる事になった。

元々、この有料老人ホームを運営する会社は、地域に向けて積極的に認知症サポーター養成講座を開催するなど活動しており、系列の有料老人ホームでは、推進員がキャラバンメイトとして認知症サポーター養成講座を数回開催していた。

(有料老人ホーム→市社協→推進員)

《立ち上げ前の工夫》

①認知症カフェを開催して地域貢献したいと言って来てくれた有料老人ホームに、西宮市の認知症カフェの考え方を説明し、理解してもらった上で一致した方向で今後立ち上げ協議をしていけるようにする。

②地域の主だった人への説明の機会を持ち、立ち上げに向けての土台をつくる。

民生委員常務、地区社協役員、自治会長、老人会会長など

☞新しいことを始めるので、地域の主だった方に知っておいてもらうことで、反対されない、また、協力してもらえることが可能になる。

住民から、聞かれた時に、『ああ、そのことは知っている、説明受けている』状況が重要。時には、住民に、『こんなとこやで。あんたも参加したらどうや』とか『知っている人に紹介してな』とか言ってもらえる。

協力が得られる場合

①協議メンバーになってもらえる。

②広報等の協力を得られる。（掲示や回覧版）

③ボランティア候補を紹介してもらえる。

※一度の説明機会では協力を得られないこともある。

《立ち上げのプロセス》

- ・立ち上げ協議の期間：平成28年2月15日～平成29年1月18日 約11ヶ月間
 - ・初回開催日：平成29年1月27日
 - ・進め方：西宮市の認知症カフェの考え方を理解してもらう。協議を進めながら仲間を増やす。地域の協力を得て、広報していく。毎回の次第と議事録は推進員が作成。
 - ・協議のメンバー：当初は、自治会長・民生委員・既に地域で活動されている方、施設職員・エリア包括・市社協・推進員。
- 協議が進む中、ボランティア候補・ボランティアに関心がある方・他の民生委員が随時加わっていく。

	内容と課題	推進員の役割・工夫
第1回 H28. 2.15	・西宮市の認知症カフェの説明 ・地域の状況とアプローチ →地域の範囲は？ →施設がイニシアチブをとればいい。 →人材確保をどうするのか？	・認知症カフェ説明資料を作成し説明する。 ・広報の範囲はあるが、参加者は来れる人はOK ・施設主体ではなく、地域住民主体であること説明。 ☞質問に対しては、前例を出して具体的に説明。 ☞次回の10町会で市社協・推進員で説明し、広報や人材確保のご協力をお願いする。
臨時 3.18	・認知症カフェの考え方 ・第2回のすすめ方の相談	☞協議の主メンバーに理解するまで説明。運営主体はボランティア、ボランティアの役割も説明。

	内容と課題	推進員の役割・工夫
第2回 H28. 3.22	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症カフェの説明と施設の思い ・ボランティア集めについて 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者(自治会長・民生委員・施設・市社協等)がそれぞれの活動場所で声かけしていく。 ☞施設のやる気を知ってもらい、協力していく関係づくり ☞役割分担をして効率的に動けるようにする。
第3回 5.31	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症カフェの運営方法について ・ボランティア集めとこれまでの広報で関心を持った人への対応 ・協議参加者から認知症カフェ説明会開催の提案 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な運営例の説明 ☞開設までの準備や運営のイメージができるようにする。 ☞ボランティア集めと広報の意味も込めて別日で認サポの開催(1回目)(認サポの効果的な開催) ☞次回協議の最初に説明会実施へ
第4回 7.11	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア希望・関心のある人に説明会実施 ・認知症カフェの説明→接し方に不安という声ができる。 ・今後について 	<ul style="list-style-type: none"> ☞認知症カフェの理解者と協力者を増やす ・地域の協力で広報先を拡大し、ボランティア候補者の接し方の不安を軽減するため、認サポを開催(2回目) ☞ボランティア増加と地域への広報の強化
第5回 8.22	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症カフェ説明 & ボランティア候補の状況 ・開催日の決定 	<ul style="list-style-type: none"> ・新参加者に繰り返し認知症カフェの説明 ☞一人ひとりの理解を深める ☞目標を作り、一致団結して向かう雰囲気づくり
第6回 9.23	<ul style="list-style-type: none"> ・運営ボランティアの確認 ・開催に向けてのタイムスケジュール ・準備物について 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味のある方が、協議に参加。その中で最終的に運営ボランティアとなる方を確認し、決定。 ・無理のないタイムスケジュールの作成

	内容と課題	役割・工夫
第7回 H28. 10.21	<ul style="list-style-type: none"> ・案内チラシについて ・準備物(施設からの貸し出しと購入分) ・認知症カフェの名称について ・代表・会計・書記の選出 	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡先は施設や専門職、チラシ作成は市社協。 ・自治会長会(10町)で、チラシの説明及び、掲示や配布協力をお願いする。☞再説明&協力依頼 ・施設に備品の貸し出しリスト作成依頼 ・名称は、ボランティアさんの思いが一番込められるもの。最終的にみんなが納得できる状況で決定する。 ☞名称が決まる事で、一気に自分達のカフェという感覚が出て、自主的な提案や動きが増加 ⇒今までのカフェにはない書記も決めることに。
第8回 11.21	<ul style="list-style-type: none"> ・準備物について ・チラシ&ポスター ・オープンイベントについて ・ボランティア名簿作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・オープンイベント準備等を通して、地域で暮らすボランティアの力とつながりの活用を意識する。 ☞今後もイベント時は自力で企画や準備できるように！ ・ボランティア保険の準備
第9回 12.19	<ul style="list-style-type: none"> ・オープン当日流れと役割分担 ・オープンイベントについて ・準備物確認 	<ul style="list-style-type: none"> 分担表、配置図、タイムスケジュール表の作成 ☞見える化して、共有し、スムーズに動けるようにする。
第10回 H29. 1.18	<ul style="list-style-type: none"> ・リハーサル 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの不安軽減。 ・動線の確認 ☞リハーサル後反省会を開き、改善点を確認し、スタッフで共有。

《活動のポイント》

- ・あらゆる機会を利用して周知活動する。
- ・アンテナを張る。
- ・地域の理解と協力を得られるような活動を行う。
- ・認知症カフェに関わる人、全員に西宮市の認知症カフェの考え方を理解してもらう。
- ・運営ボランティアの自主性が育つような関わり
- ・認知症サポーター養成講座を効果的に活用
- ・ボランティア集めを通して、認知症カフェを理解してくれる人を増やす。

《活動の効果》

- ・立ち上げプロセスそのものが、地域の認知症啓発の役割を果たす。
 - ・立ち上げプロセスの中で地域の人材交流が進む。
 - ・繰り返しの認知症カフェの説明や認知症サポーター養成講座により、認知症を身近な事、自分事として考えるようになる。
- オープン時の代表の挨拶を聞いたときに、認知症カフェを本当に理解してくれて、実践しようとしていることが分かり感動！
- ・地域に拠点となる可能性のある新しい社会資源が生まれる。
 - ・新たな地域活動の担い手が掘り起こされる。
 - ・“自分達の認知症カフェ“の意識が生じた時から、自主的な提案や活動がどんどん出てくる。

(4) 継続支援事例一 かすたねっこの場合



《かすたねっこのデータ》

- ・西宮市で初めての認知症カフェ
- ・開催日：平成24年1月→オープンから7年4か月経過(2019年5月現在)
- ・立ち上げ支援期間：約半年
- ・月2回、1回2時間の開催、会費は1回100円
- ・当初のボランティアは5名
- ・推進員が拠点としている認知症カフェ



ロバ隊長のマスコット作り



◆開設当初の課題

①人が来てくれるか心配

運営ボランティアにとっては、『準備したけれど参加者が来なかったらどうしよう！』

と参加人数が一番心配で一喜一憂する日々。

☞地域に向けた広報活動を一緒に行い、参加者が増える手伝いをする。

・UR32号棟ある40数か所の掲示版にチラシを手分けし貼る(掲示期限が来て、はがす作業も一緒←こっちのほうが大変)。

・分譲マンションや各自治会には推進員が説明に伺い、チラシ掲示をお願いする。

・包括職員やケアマネジャー等にチラシをお渡しし、訪問時に紹介してもらうようにする。

・医療機関・薬局・スーパー・郵便局等にもチラシ掲示のお願いをする。

②認知症カフェの内容はこれでいいのか？

・隣室が図書館で音楽関係の催しができない環境の中で、時々はおしゃべり以外に変化をつけたい。

☞運営ボランティアで出来ることを考えてもらう。→気分転換に簡単な体操をする。

☞市の出前講座やボランティア団体を紹介し、1回目をつなぎ、2回目からはボランティアで連絡して手続できるように。

☞音楽関係(ハンドベル演奏)については1階のデイサービスと共催することで可能となる。

《推進員の役割》

・広報に関する支援

・ボランティアの不安軽減(反省会には必ず出席)→ボランティア自身で出来ることを増やす

・運営を楽しくする社会資源の紹介とつなぎ

・認知症カフェと他との交流の支援(デイサービスとの交流:餅つき、フラダンス、ハンドベル等)

◆1年経過後の状況と課題

《状況》

- ・運営ボランティアは、準備～反省会という一連の流れは板についてきたが、代表に頼りがちな面もある。
- ・参加者数は安定してきた。
- ・西宮初の認知症カフェと言われ、市会議員等の見学があり、参加者が動揺する。
- ・認知症の人が参加するようになった。(若年性認知症の人も)

《課題》

①認知症の人への接し方やどこまでなら対応できるのか？

- ☞認知症勉強会の開催。色々な場合を想定して、ボランティアができることを考えてみる。
- ☞今から、限界を考えるのではなく、具体的に認知症の人への対応で課題が出た時に専門職と一緒に考える。

②参加者に認知症カフェを理解してもらう。

- ☞カフェの説明機会を作り、後は随時説明する。カフェで認知症の人と過ごす中で理解してもらう。

③運営等に関するボランティア間の微妙な意見の相違が出てくる。

- ☞公平中立な立場でボランティア一人ひとりの話をよく聴き、活動を認める声かけをする。

《推進員の役割》

- ・認知症勉強会の開催
- ・認知症カフェの様子把握とボランティア一人ひとりとしっかりコミュニケーションをとる。
(各ボランティアの背景・考え方、ボランティア間の微妙な人間関係等)
- ・反省会には極力参加し、課題把握と建設的な前向きな話し合いができるような声かけをする。
- ・各ボランティアに自信を持ってもらうよう言葉をかける→各ボランティアの役割の拡大と自立化
→ボランティアで話し合い、当番表を作成し、みんなが色々な分担ができる。
- ・課題に対して、ボランティアで考えても困ったことを一緒に考え、対応方法を決めていく中で信頼関係を築き、相談してもらえる関係を維持。
- ・『課題⇒対応』の蓄積によりボランティア対応力アップを図る。
- ・認知症の人を支える他の社会資源の紹介やつなぎ。

◆現在の状況と課題

≪状況≫

運営ボランティアは色々な事を経験し、大概のことは自分達で対応可能。

≪課題≫

①当初の運営ボランティアの高齢化

開始から7年以上が経過し、当初から関わってくれている運営ボランティアが高齢化。ご自身の体調やご家族の病気等でボランティアが困難になる事も出てきた。

☞ボランティア募集専用のチラシ作成印刷をバックアップ

②運営資金不足

開設から2年間は市社協からの助成金5万円があり、その後は県民ボランティア活動助成金以外にも各種団体から寄付金を得る機会があつて、運営資金的に成り立っていたが、今年度は苦しい状況になってきた。

→自分達で解決方法を考える。地域のバザーへ。『広報の機会にもなるしね！』

『参加者も巻き込もう！』

→私たち、こんなこと考えているんだけど、と推進員に相談

☞認知症カフェに関わる人みんなで楽しみながら地域に出かけよう！

≪推進員の役割≫

・運営ボランティアの対応力アップを常に考えて行動する。

・ボランティアと専門職で立ち位置は違うけど、認知症カフェを大切に思っている気持ちは同じ。共感と愛着を持って活動を続けたいと思える雰囲気づくり。

《継続支援の効果》

- ・運営ボランティアの成長
 - ・自然体での認知症の理解が深まっている。
 - ・参加者が自主的なフォローを自然にしている。
 - ・参加者から、認知症があっても幸せな人がいると発言あり。
 - ・専門職の成長：参加者から学ぶ場面も多い。
 - ・早期発見・早期対応がスムーズ：顔見知りの関係ができ、言いにくいことも伝え、即相談・即対応が可能。
 - ・認知症カフェ以外の日常生活の中でのつながり合い、見守り合いしている。
- 認知症カフェがなかったら、出会っていなかった人達が、仲良くなり、地域で助け合って生活している。

→地域力向上へ

7. 課題と今後の活動・取組みの方向性

●まだできていない包括圏域での開催に向けてどのように働きかけていくか。

→周知活動の強化

認サポ、専門職向けの研修会、市民祭り等の様々な機会を利用。

→推進員主催で認知症カフェ説明会を開く。

●認知症カフェの立ち上げ・継続には、運営ボランティアが必要で、いかにして、人材発掘や育成をしていくか。

→認知症サポーター・キャラバンとの連携により、人材育成と活動へつなげる

●既存の認知症カフェで、認知症カフェの役割やボランティア・専門職・包括の役割の理解に差があるため、共通認識をもつ必要がある。

→共通認識を持つために認知症カフェ交流会・勉強会を開催する。

●認知症カフェ同士の横のつながりがほとんどない。

→人事交流や活発な意見交換が行える認知症カフェ連絡会を立ち上げ、認知症地域支援体制の一翼を担える存在に！

● 認知症カフェの数が多くなったときに推進員が全カフェに丁寧に関わることが困難になる。

(1) 運営ボランティア

・カフェで出てくる課題に対応していく中で、成長し自立化を進める。

(2) 専門職

・ボランティアが自立できるように意識して関わる。

・ボランティアの一番身近な相談相手として信頼関係を築き、包括と連携する。

(3) 包括

・圏域の認知症カフェの状況をしっかり把握し、推進員と連携する。

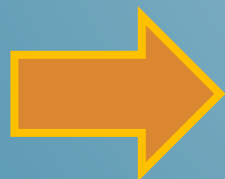
・認知症カフェを地域の社会資源として有効活用する視点を持ち、地域力向上につなげる。

(4) 推進員

・全認知症カフェを見渡すために、連絡会の活性化を図る。

・カフェに関わる専門職等と相談してもらえる関係性を築き深める。

● 認知症カフェの役割やどんな場所であるかの理解が運営ボランティアや専門職だけでなく、一参加者、地域住民にも広がれば。



地域の認知症カフェから出発し、つながりを増やししながら、認知症地域支援体制へ

8. 全国の推進員へのメッセージ

- ・配置されている自治体の認知症施策を勉強し、強み弱みを理解する。
 - ・自分の置かれている環境をよく見て、出来そうなところから始めてみる。
- どんな小さなことでもいいので、誰かと一からやってみる。

（例） 認サポを開催して活動してみたい人とつながる。

- ・ちょっと聞いてみよう、相談してみようと思える人を作る。
- ・活動を通して仲間を作る・増やす・広げる。

→会えば、会うほど人間関係は出来ていきます。

（例） 認サポでつながった人達と一緒にできる活動を考える中で、認知症カフェをやってみようという話になるかもしれない。

- ・どっぷり推進員に浸っていないからこそその感覚を大切に！
- ・フットワークは軽く！
- ・複数の推進員がいる所は、情報共有と共通認識をしっかりとって、進めていくことが大事！

